

友人と出資して会社を設立した

安易に連帯保証人になって取り返しがつかなくなった社長からの相談は、何処にでもありがちな身近なトラブルとして心に留めておいていただきたいのでご紹介します。

志を同じくする友人たちと三人で会社を設立した。設立当初から社長が営業を担当し、財務と製造部門はそれぞれ友人が担当してスタートした。資金も三人が各五百万円ずつ均等に投資していたので給料は同額にした。設立した時期が良かったのか事業も時流に乗り徐々にではあったが順調に伸展していった。

売上が急伸した。売上の急伸により運転資金の借入をしなければ資金繰りが回らなくなった。慌てて事業計画書と資金繰り表を作り、金融機関に融資の申し込みをすることとなった。融資を受けるには社長の連帯保証が必要であった。他の二人と同じ給料なのに…急に大きな責任が被さってきたことに正直言って「間尺に合わない…」と感じることもあった。仕事はますます忙しくなっていた。

主要取引先から新規の仕事を依頼されたことで、設備機器を増設しなければならなくなった。何度か融資を受けていたので、さらなる追加融資の条件として社長以外の連帯保証人が必要だと言うことであった。会議の席で役員に連帯保証人の件を切り出したら「リース購入」することを提案され、結局、新規の設備機器はリース契約で購入することとなった。リース契約にはふたたび社長の連帯保証が必要であった。借入金の残高もまだ僅かに減っただけで債務には変わらない。今回のリースと併せて連帯保証している金額が二千万円近くにもなっていた。

会社が次第に大きくなってきたことは社長としても実感できてはいたものの、「何故自分だけが債務保証しなければならないのか…」と社長の不満は大きくなるばかりだった。「自分が受注してきた仕事だし…」「他の役員は保証債務の責任を避けていることだし…」と言う気持ちもあり、社長は次第にワンマン化していき独断的に経営に当たるようになっていった。

仲間が辞任届を出して独立を告げる…

社長の独走に不満が出てきたのか…、社長の給料を昇級させたことがきっかけで役員の一人が独立したいと辞任届を提出してきた。一瞬のことだったが…「何故だ…!」「勝手に独走しすぎたかな…」「いや…いままで債務保証を避けていたのはこのつもりだったのか…」とどちらかといえば憤りを感じた。しかし、落ち着いて冷静になって考え始めると…これからの仕事に不安さえ感じてくるようになっていった。

辞めるといふ役員のほうから相談があった。退職した後もこの会社とも連携をもってやっていきたいというのだ。技術者の役員に対する顧客の評価も高かったので、これなら従来の営業展開でも問題なくやっていけるように思った。必要以上に寛大な気持ちをもって彼が設立するB社との協力体制を表現し新たなスタートを切ることとなった。



いままでのように生産工程を自由に調整できない不満もあったが、大きな問題もなく従来の取引先からの仕事を消化することができた。4ヶ月ぐらい経って新規の受注が入ったので、B社の生産体制について打ち合わせをすることとなった。現在の設備では生産は無理なので新たに機器を購入しなければならぬのだと言うのだ。必要な設備を貸与してくれ

リスク・カウンセラー奮闘記

るか購入のための借入の保証人になって欲しいと頼まれてしまった。

彼が設立したB社は、いわゆる1円会社であって5年後迄には資本金を1千万円にする目論見で設立していたようで、現在の資本金は100万円の株式会社だそうだ。設立したばかりで事業実績がなく、資本金が少ないなどの理由から融資を受けるには連帯保証人が必要だというのだ。仕事を断るわけにも行かないし、自分の会社だって融資枠がいっぱいだと言うし、やむなくB社が契約するリースの連帯保証人になってしまった。

関係を深くしたいと連帯保証人に…

B社への発注はその後も継続していたが、当社以外の取引先S社からの仕事で忙しくなっているらしく当社から発注する仕事が遅れがちになってきたのが気になっていた。打ち合わせにB社に行っても落ち着いて打ち合わせが出来ないほどS社から受注した仕事でてんこ舞いのようだ。もっと当社の仕事を優先して欲しと申し入れた。増員分の人件費と設備購入で資金が不足しているので難しいという。その借入には再び連帯保証が必要だという。S社より優位な状況で生産体制を掌握しておきたかった気持ちが強くなり、連帯保証人となり積極的に融資に協力することとなった。いま思うと結果的にそれがまずかった。

S社が倒産した。連帯保証していた融資の外にもノンバンク系や消費者金融などからも借入があり再建の目処が立たないのでB社の破産申立の手続きをしたいと言ってきた。S社との取引にかなり無理をしていたようで採算が取れるどころか赤字だったようだ。何とか赤字を解消しようとギリギリまで頑張っていたようだ。当社からの支払も前渡金などで融通しながら仕事を出していたので、当社として今から支援することはかなり難しく今後の営業活動についても致命的な打撃だ。その上、連帯保証している債務だけでもいつの間にか2千万円を超えていた。

保証債務の重さを悔やんでも元には…

彼には資産がないと言う。自分が連帯保証をしている分だけでも何とかならないかと詰め寄ったが、残念ながら「申し訳ない…」と言う言葉しか返ってこない。

埒があかないので自分で金融機関やリース会社にも行って相談してみた。リース会社も「期限の利益を喪失したから…」という法的手続きに則ってリース物件を引き上げるという。それにしても2千万円の保証債務とは余りにも大きすぎる。生産体制も再構築しなければならぬし、まずは仕掛品を引き上げることとし火急的に速やかにスクリーニングをして、次の一手に着手することにした。

連帯保証は自分が直接借金をした時と違って、前触れもなく突如としてその追求があることを十分に覚悟しておかなければならない。



山懐の土手に咲く芒の穂が…冷たい秋風に吹かれ冬の訪れの舞を演じる。土手に上がると足下から数十匹のイナゴが飛び立った。

R.F.C Information & Report・第022号 2005.10.17 No.2005-10

◇発行者 株式会社ホロニクス総研 〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12 かんたビル7階



◇責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟士 (t-hosono@holonics.gr.jp)

◇連絡先 Phone(03)5684-0021 Fax.(03)5684-0031

<http://www.holonics.gr.jp>

【ホロニック】(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態をいう。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する(小学館「カタカナ語の事典」より)